

# 部派仏教における施餓鬼の構造

—有部と上座部による廻向の教理的な理解—

清水俊史

## 0. 問題の所在

本稿は、上座部と有部の資料において説かれる施餓鬼の構造を検討し、そのなかに現れる廻向について考察する。本稿で取り上げる〈施餓鬼〉とは施者が餓鬼たちの安楽を願って彼らのために食事や衣服を施すことであり、〈廻向〉とはその施の功德を餓鬼たちに振り向けることである<sup>1)</sup>。しかし人界にいる施者が餓鬼界にいる餓鬼たちに直接施すことは出来ない。また餓鬼界にいる餓鬼たちも、人界で施されたものを直接手で触れたり食べたりすることは出来ない。この両者を繋ぐためには、僧団という中継点を通す必要がある。つまり、施者が僧団に対して布施などの善業を行い、その功德を餓鬼たちのために廻向することによって、廻向された餓鬼たちは何らかの果報を受けるのである。現代でも見られるこのような施餓鬼は、仏教では既に初期經典の内に現れ<sup>2)</sup>、その後部派仏教や大乘仏教にも引き継がれていく。

ところで、「善業をなしているのは施者であるのにもかかわらず、その善業の功德を受けるのは廻向された餓鬼である」という、この施餓鬼および廻向というものが〈自業自得〉の原則を破っているのではないかと、という問題が度々指摘されてきた。施餓鬼を説く初期經典などを読むと、「施者のなした善業(甲)が廻向された餓鬼に移譲され、その善業(甲)の果報を餓鬼が享受する」という〈他業他得〉が説かれていると理解することもできる。この自業自得の原則と廻向との間にある矛盾をどのように解決するかについて、多くの研究がなされている。Gombrich [1971]; McDermott [1975] [1977]; 櫻部建 [1974 b] (= [2002: pp.136-147]); Schmithausen [1986]; 入澤崇 [1989] などは、

初期經典における廻向が〈他業他得〉であると理解している。

一方、Pv. および PvA. を詳細に検討した藤本晃 [2006] は、初期經典における廻向も〈自業自得〉の原則を守っていると主張する。これは、上座部註釈文献における廻向の構造が〈自業自得〉の原則を守っており、その構造が初期經典における理解にも適用できると考えているからである。上座部註釈文献では、自業自得の原則に反しないように廻向の仕組みを次のように構築している。

すなわち、廻向とは、施者が僧団に布施をして、特定の誰かあるいは一切衆生の繁栄や幸福が増すことを願うだけのことであり、実際に廻向される対象者がいるかないかは問題とされない。また、廻向は単に他者の幸福を願うだけのことであるから、いくら廻向したとしても、施者の善業が減ることはなく、僧団に布施した分の善業をそのまま得ることが出来る。一方、廻向の対象者は、それに気付けば、廻向者が行った善業に対して随喜(anumodana)を起こす。この随喜(anumodana)は善業であり、それを起こした本人に楽の果報を与える。したがって廻向がなされたとしても施者から対象者に善業が移譲されるのではない。あくまでも、施者と対象者とがそれぞれに善業を起こしているのである。したがってこのような廻向の仕組みは、自業自得の原則を逸脱していないことになる。

このような上座部教理における廻向の仕組みは Malalasekera [1967]; Spiro [1971]; Schmithausen [1986]; Withanachchi [1987]; 浪花宣明 [1987] らによって徐々に明らかにされ、その後、藤本晃 [2006] が Pv. と PvA. における施餓鬼の構造を検討することによってこの結論を補強した。これら結論は、複数の上座部註釈文献において一致して確認されることからより一層強く支持される。

しかしながら、これは五世紀以降に記された上座部註釈文献に現れた記述であり、この理解が、そのまま初期經典まで遡れるか否かについては、さらなる吟味が必要であると思われる。「遡り得る」と主張する藤本晃 [2000b: p.63.16-21] [2006: p.139.17-28] も、Pv. などの初期經典の記述からだけでは、そこにあらわれる廻向が、自業自得の原則を守っているのかどうかについて、よく解らないと指摘している。それにもかかわらず「註釈文献における記述がその

まま初期経典の理解にまで遡り得る」とする根拠は「註釈文献の記述は、初期経典の内容を全く踏み越えることがない」という考えによる<sup>3)</sup>。一方、Schmithausen [1986] や Withanachchi [1987]などは、このような上座部註釈文献に説かれる廻向の構造は、部派仏教の教理によって解釈されたものによらず、初期仏教まで遡り得ないと考えている。

そこで本稿は、より多くの資料を用いて、廻向や施餓鬼の構造と、その歴史的な展開とを検討する。本稿の1.では上座部註釈文献以前に成立した Kv. と Mil. における施餓鬼の構造を検討する。続く2.では、これまで全く取り上げられてこなかった有部資料を用いて有部における施餓鬼の構造を検討する。

## 1. 上座部における施餓鬼の構造

既に述べたように、上座部註釈文献における施餓鬼の構造は、「餓鬼は布施に随喜し、その随喜が善業となって餓鬼自身に果報を与える」として自業自得の原則に反しないように解釈されている。ここでは Kv. と Mil. の両資料を用い、このような随喜によって自業自得を説明する解釈が、上座部資料において一貫して現れているか否かを検討する。

### 1. 1. Kv. における施餓鬼

Kv. における施餓鬼は、McDermott [1975: pp.431.a6-b4]; Schmithausen [1986: pp.215.7-20]; 藤本晃 [2006: pp.146-150]らによって検討され、そこに説かれる施餓鬼の構造が〈自業自得〉の原則に反しないよう説かれている点が指摘されている<sup>4)</sup>。ここでは、従来の研究で取り上げて来られなかった KvMT. と KvAT. も加えて検討し、前節0.でみた上座部註釈文献における施餓鬼の構造の祖形が、Kv. において見られる点を考察する。

Kv. では「施餓鬼は自業自得の原則を逸脱しているのではないか」という議論が交わされている。そこでは、Pv. i, 5の第六偈にある「此処(人界)より施されたものによって死せる餓鬼たちはそこ(餓鬼界)に生存する」という文言の解釈をめぐり、どのように餓鬼たちが廻向された施物を受用しているのかにつ

いて議論されている。「此処より施されるものによって其処で生存する」という言葉を認めれば、他業他得を認めることに繋がってしまうとして、次のように上座部論師は論難している。

Kv. 7, 6 (p.347.14-18):

【自論師】「此処より施されるものによって其処で生存するののか」

【他論師】「その通りである」

【自論師】「ある者(A)が別の者(B)の行為者となるのか。他作の苦楽がある者(A)が為し、別の者(B)が感受するののか」

【他論師】「そのように言ってはならない…略…」

他業他得を認めていない点から上座部が、施餓鬼について自業自得の原則を適用して理解している態度が伺える。また随喜に関する言及もある。

Kv. 7, 6 (p.347.19-27):

【他論師】「〈此処より施されるものによって其処で生存する〉と言ってはならないのか」

【自論師】「その通りである」

【他論師】「餓鬼たちは自分のために布施を行いつつある者に随喜し、心に淨信を起し、喜びを生じ、喜悅を得るのではないのか」

【自論師】「その通りである」

【他論師】「もし〈餓鬼たちは自分のために布施を行いつつある者に随喜し、心に淨信を起し、喜びを生じ、喜悅を得る〉なら、それゆえに実に〈此処より施されるものによって其処で生存する〉と言うべきである」

ここでは「餓鬼が布施に対して随喜する」と述べられているものの、後代の註釈文献における「餓鬼が随喜することによって果報を得る」というような説明まではなされていない。この部分の註釈によれば、この〈随喜〉をめぐって上座部論師と敵論師との間で見解の相違があったとされる。上座部註釈は、こ

の〈随喜〉こそが布施の受用であると述べている。

KvA. 7, 6 (p.99.10-13):

「布施を行いつつある者に」とは、「布施を行いつつある者を見て」という意味である。また、其処(餓鬼界)で〔餓鬼〕自身が随喜することから、彼ら(餓鬼)にとって其処(餓鬼界)で受用が起こるのである。それゆえに、この理由によって彼(他論師)が執見<sup>5)</sup>を確立したとしても<sup>6)</sup>、非確立である。

この理解はダンマパーラによる KvAT. でも同様に認められている。

KvAT. 7, 6 (VRI: p.120.3-4):

「この理由によって」とは、「くまきに随喜したので、彼らにとって其処で受用が起こる」というこの理由によって」のことである。

「施物を実際に手にすること」が受用ではなく、「餓鬼が布施に対して随喜すること」が受用であると述べられており、自業自得の原則が守られていることが解る。また KvA. 以降の註釈によれば、Kv. において敵論者は「随喜なしに布施の受用がある」という執見を抱いていたとされる。

KvA. 7, 6 (p.99.2-5):

次に、此処施論と呼ばれるものがある。ここに「此処(人界)より施されたものによって死せる餓鬼たちはそこ(餓鬼界)に生存する」(Pv. i, 5)という語によって「此処(人界)より施された衣など、それだけによって生存する」と、ある者たちに執見がある。たとえば王山部・義成部にである。

KvMT. 7, 6 (VRI: p.89.2-3):

「それだけによって生存する」とは、「自ら為した業なしにも、衣などそれだけによって生存し、あるいは衣などの布施だけによって生存する」と

いう意趣である。

KvAT. 7, 6 (VRI: p.120.2-3):

「衣などの布施だけによって」とは、「随喜することなく、施者によって  
転じられた衣などの布施によって」ということである。それ故に「自ら為  
した業なしにも」と述べられたのである。

以上、Kv. およびその註釈を検討した。Kv. の段階では〈随喜〉と〈自業自得の原則〉という二つの要素が別々に説かれており、後世の KvA. などの註釈文献におけるような、これら二つを総合した施餓鬼の構造が明示されて説かれているわけでない。しかしそのような構造の祖形は、既に Kv. のなかに現れている。

## 1. 2. Mil. における施餓鬼

前節1. 1. では Kv. 7, 6 とその註釈を検討し、上座部註釈文献に見られる施餓鬼の構造の萌芽が Kv. に見られることを指摘した。上座部註釈文献では施餓鬼の構造について、「施者が僧団に布施しそれを餓鬼たちに廻向すると、廻向された餓鬼たちはその布施に随喜する。餓鬼たちの起こした随喜は善業であり、その善業こそが餓鬼たちに果報を与える」と理解している。したがって上座部の理解に従うならば、施餓鬼は自業自得の原則に反していない。なぜなら、廻向された餓鬼に何らかの果報があったとしても、それは餓鬼自らが起こした善業(=随喜)によるものであり、決して施者のなした善業(=布施による善業)が餓鬼に移譲されているわけではないからである。

しかし Kv. 以降に成立したとされる Mil. を検討すると<sup>7)</sup>、そのような上座部註釈文献で説かれる、随喜によって餓鬼の果報を説明する施餓鬼の構造は現れない。むしろ Mil. の問答からは、施者から餓鬼に功德が移譲されているという〈他業他得〉の理解のもとに施餓鬼が説かれていることを示唆する記述がみられる。これを主張するのは McDermott [1977] や玉井威 [1982]<sup>8)</sup>である。McDermott [1977] は、Mil. における廻向の問題に対する長老ナーガセーナ

の回答が、Kv.などで説かれるような上座部の正統説から外れており、〈他業他得〉の廻向が説かれていると指摘している<sup>9)</sup>。しかし、未だMil.における廻向の構造と、上座部註釈文献で説かれる正統説とを、文献学的に比較した研究は不十分であるように思われる。そこで本節では、Mil.に説かれる廻向の譬喩と、上座部註釈文献に記される譬喩とを比較し、その譬喩から得られる廻向の構造が異なっている点を指摘する。

ミリンダ王の「施餓鬼をしても、廻向された対象者が存在しなかった場合、その施の果報は消えて、無意味になってしまうのか」という問いに、ナーガセーナは「消えることなく、施者がその果報を受ける」と答え、次のような譬喩を述べている。

Mil. (pp.294.18-295.4):

「尊者ナーガセーナよ、それではもし〔布施の対象として〕指定された者たちが得ないのであれば、施者たちの施は流失し果報の無いものになってしまいます」

「大王よ、実にその施は果報の無いものではなく、異熟の無いものではありません。まさに施者たちが、その果報を受けます」

「尊者ナーガセーナよ、それでは根拠をもって私を納得させてください」

【譬喩1】「大王よ、ここにある人々が魚・肉・酒・飯・硬食を用意して、親族の家に行くとします。もしその親族たちが、その贈物を受け取らなければ、はたしてその贈物は消失し、あるいは消滅するでしょうか」

「尊者よ、そうではありません。まさに所有者にそれがあります」

【譬喩2】「大王よ、〔それと〕同様に施者自身が、その果報を受けるのです。大王よ、あるいはまた〔295〕、部屋へ入った人がいるとします。前方に出口が無ければ、どこをかって彼は出るでしょうか」

「尊者よ、入った同じ場所をかって〔出ます〕」

「大王よ、〔それと〕同様に施者自身が、その果報を受けるのです」

ナーガセーナの回答のうち、【譬喩1】では〈功德〉が〈贈物〉に、〈餓鬼〉

が〈親族〉に、〈施者〉が〈贈物の所有者〉に譬えられている。【譬喩2】では〈功德〉が〈部屋へ入った人〉に、〈餓鬼〉が〈前方の出口〉に、〈施者〉が〈部屋の入口〉に譬えられている。この譬喩において功德は、随喜などによって餓鬼の内に起こるものではなく、施者から餓鬼に物質的に移譲されるものとして譬喩されていることが解る。従って、廻向の対象者がいれば、その功德は対象者に移譲され、施者には戻ってこないことが暗示されている。

ところで上座部註釈文献の理論に従えば、施者と餓鬼の起こす功德は其々が別々に起こすもので、施者から餓鬼へ物質的に移譲されるものではない。従って、たとえ餓鬼が功德を受けても受けられなくても、そのことが施者の功德の増減に影響することはない。しかし、この Mil. におけるナーガセーナの回答は、餓鬼が功德を受けるか否かによって施者の受ける功德が増減すると述べているのであるから、このような構造は、上座部註釈文献における施餓鬼の構造と一致しているとは言いがたい。

また、ナーガセーナは、善業が餓鬼に廻向されることについて次のように喩えている。

Mil. (p.297.5-14):

大王よ、たとえばおおくの水を湛えた泉において、一方から水が入り、一方から流れ出るとしましょう。流れ出つつあっても、次々と〔水が〕生じ、尽きることはありません。大王よ、全く同様に、善はますます増大します。大王よ、もしある者が百年間も為した善を傾注するならば(āvajjeyya)、傾注するたびにますます善は増大します。彼は、その善を欲する人々とともに分け合うことが出来ます。大王よ、ここではこの根拠ゆえに、善は多大なのです。

〈施者の為した善業〉が〈泉にたまった水〉に、〈廻向〉が〈その泉から水が流れ出ること〉に譬えられている。ここでも廻向された功德(=善業)が施者から対象者に物質的に移譲されるものとして表現されていることが解る。以上



の譬喩からもわかるように、Mil. から読み取ることのできる施餓鬼の構造は、上座部註釈文献で見られた構造と異なっている。

一方、上座部註釈文献である DhsA. などにおける布施に関する注釈を検討すると、そこで説かれる譬喩は、Mil. における譬喩とまったく相違している。DhsA. で説かれる譬喩は、上座部註釈文献で見られる施餓鬼の構造とよく一致している。次のような譬喩を述べている<sup>10)</sup>。

DhsA. (p.158.20-30):

布施をなし、香などで供養をなし、「かの誰々という者に利益(patti)あれ」あるいは「全ての衆生に〔利益〕あれ」と、利益(patti)を与えるゆえに〈利益の施与(pattānuppadāna)〉であると理解されるべきである。

【疑】しかし、そのように利益(patti)を与える者の福德(puñña)が尽きてしまうのではないか。【答】そうではない。あたかも一つの灯火を灯し、それから千の灯火を灯しても、最初の灯火が尽きたと言われず、逆に先の〔灯火の〕光と後の〔灯火の〕光が合わさって一つになって一層大きくなる。同様に、そのように利益(patti)を与える者に〔福德の〕減退はなく、逆に増大するのみであると理解されるべきである。

他の人たちによって施された利益、あるいは他の福德ある所作に対して「善いかな。善いかな」と随喜することが、〈随喜(abbhanumodana)〉であると理解されるべきである。

ここでは〈利益〉が〈灯火〉に、〈利益の施与〉が〈灯火を灯すこと〉に譬えられている。「元の灯火を他の灯火に燈しても、元の灯火が消えることはない」という譬喩は、「施者と餓鬼の起こす功德は其々が別々に起こすものであり、餓鬼に廻向するからといって施者の功德の増減に影響はない」とする上座註釈文献における施餓鬼の理解と一致している。

従って、この DhsA. の譬喩は、Kv. やその他の上座部註釈文献で説かれる随喜による施餓鬼の構造と矛盾しないように説かれている。仮に Mil. のよう

に功德を物質的に移譲することが廻向であると理解されて譬えられたならば、〈利益〉が〈灯火の油〉に譬えられていたであろう。

このように Mil. における施餓鬼の構造は、上座部註釈文献で現れるものと異なった構造であった可能性が考えられる。Mil. では、上座部註釈文献のように「餓鬼が布施に対して〈随喜〉という善業を起こす」という自業自得の原則を貫く解釈は見られない。Mil. における施餓鬼の構造は、廻向した功德が施者から餓鬼に移譲される、すなわち他業他得を暗に認めている。

### 1. 3. 小結

Kv. と Mil. における施餓鬼の構造を考察した。次の二点が指摘される。

- ・上座部註釈文献における、自業自得の原則に基づいた「餓鬼は布施に随喜し、その随喜という善業が餓鬼自身に果報を与える」という解釈の萌芽は、阿毘達磨文献である Kv. において現れる。
- ・一方、Mil. における施餓鬼の解釈は、上記の上座部註釈文献に見られる解釈と異なっており、廻向した功德が施者から餓鬼に移譲されることを意味する譬喩が用いられている。これは Mil. において、他業他得の構造のもとに施餓鬼が解釈されていた可能性を示唆する。

したがって、同じ上座部所伝の資料でありながら、施餓鬼に対する異なった解釈があらわれることは、廻向を巡る解釈が最初から一枚岩でなかったことを示しているように思われる。

## 2. 有部における施餓鬼の構造

廻向や施餓鬼に関する研究は多くあるが、そのなかで有部における施餓鬼の研究は、これまでほとんどなされてこなかった。しかし有部も施餓鬼や廻向ということ認めていないわけではない。有部所伝と思われる『雜阿含』巻37, 1041 (= AN. x, 177)は施餓鬼を説く經典であり、その後の有部論書にも施

餓鬼に関する言及が見られる。本章では、それらを通して、有部における施餓鬼の構造を考察する。

### 2. 1. 『発智論』における施餓鬼

有部阿毘達磨文献の中で初めて施餓鬼が問題とされるのは『発智論』巻1 (T26.919c12-27)<sup>11)</sup>においてである。そこでは、「なぜ施餓鬼の対象が餓鬼のみであるのか」という疑問に対し、『発智論』は「法爾(dharmata)としてそのようなのである」と答えているだけである。この『発智論』の段階では、まだ自業自得の問題には触れられていない。なお、『発智論』の註釈である『大毘婆沙論』によれば、この議論は、『雑阿含』巻37, 1041 (=AN. x, 177) の内容を解釈しているのであると述べている<sup>12)</sup>。

### 2. 2. 『婆須蜜論』『大毘婆沙論』『順正理論』における施餓鬼

有部論書のなかで「施餓鬼が自業自得の原則に違犯するのではないか」という問題は『婆須蜜論』のなかに初めて現れる<sup>13)</sup>。この問題に対し『婆須蜜論』は、次の四説を挙げている<sup>14)</sup>。

第一説：餓鬼は顛倒しているので食を食であると見ない。しかし餓鬼が施に対して歓喜すれば、心は顛倒しなくなり、増上行を得て食を受けることが出来る。

第二説：餓鬼は嫉妬の意があるので善い境涯へ行くことが出来ない。しかし餓鬼が施に対して歓喜すれば、その善心によって善い境涯へ行くことが出来る。

第三説：餓鬼は嫉妬の意があるので、心が常に疲れている。餓鬼が施に対して歓喜すれば、心は広大になり、増上行を得て食を受けることが出来る。

第四説：餓鬼は施に対して善心を起こし、その善心によって食を受けることが出来る。

具体的な廻向の構造について四説いずれも、「餓鬼は施に対して歓喜し、それによって何らかの果報を得ている」として、自業自得の原則を主張していることがわかる。

続いて『大毘婆沙論』の中にも「施餓鬼が自業自得の原則に違反しているのではないか」という問題が現れている。『大毘婆沙論』は次の四説を挙げ、『婆須蜜論』と同様に自業自得の原則を主張している<sup>15)</sup>。

第一説：餓鬼は布施に対して随喜し、捨相応の思を起こして順現法受業をつくり、それが異熟を与える。

第二説：餓鬼は既に前世において飲食を得る業をつくっているのであるが、慳貪の心があったので現世では顛倒を起こしてしまい食を受用することが出来ない。餓鬼が布施に対して随喜し、捨相応の思を起こすと、この顛倒を取り除くので、食を受用できるようになる。

第三説：餓鬼は既に前世において飲食を得る業をつくっているのであるが、慳貪の心があったので現世では力が弱く、力持ちの鬼神たちがいる食事場所に行くことが出来ない。餓鬼が布施に対して随喜し、捨相応の思を起こすと、心身が強くなり、食事の場所へ行行って食を受用することが出来る。

第四説：餓鬼は既に前世において飲食を得る業をつくっているのであるが、それが微劣であるので、現世で与果することが出来ない。餓鬼が布施に対して随喜し、捨相応の思を起こすと、その前世でつくった業が与果できるようになる。

いずれも餓鬼が布施に対して随喜し、捨相応の思を起こして、それが餓鬼に異熟を与えると考えられている。捨(upekṣā)は大善地法であるから、捨相応の思とは善業であることが解る。この四説とも、捨相応の思がどのように餓鬼に異熟を与えるのかという点に違いがあるが、いずれも自業自得の原則を守っている。

有部論書における施餓鬼の構造に関する記述は、『大毘婆沙論』が最も詳し

い。『俱舍論』では施餓鬼に関する記述は見られないようである。『順正理論』で衆賢は、餓鬼を解説する部分で施餓鬼について触れ、『大毘婆沙論』における第一説を紹介している。

『順正理論』卷31 (T29.517c10-12):

彼鬼見已。於自親知及財物中。生已有想。又自明見慳果現前。於所施田。心生淨信。相續生長捨相應思。由此便成順現法受。

彼の鬼は見已りて、自らの親知及び財物の中に於て、己有の想を生ず。又、自ら明らかに慳果の現前するを見て、所施の田に於て、心に淨信を生じ、捨相應の思を相續し生長す。此れに由りて便ち順現法受を成ず。

### 2. 3. 小結

有部資料中における施餓鬼に関する記述を検討した。有部は、施餓鬼の構造について「餓鬼は施に対して随喜し、捨相應の思を起こし、その思が餓鬼に何らかの果報を得ている」と解釈し、自業自得の原則を主張している。これは『婆須蜜論』以降の論書において一貫して見られる。さらにこの構造は、上座部註釈文献における施餓鬼の構造と同一である。

## 3. 結論

上座部と有部の資料における施餓鬼の構造を検討した。これらを要約すれば、次の二点が指摘される。

- ・上座部と有部の論師たちが伝える施餓鬼の構造は同一である。廻向について「施主から餓鬼に善業が移譲される」と解釈せず、あくまで自業自得の原則を貫き、「餓鬼は施に対して随喜し、その善業である随喜こそが餓鬼に果報を与えている」と理解している。両部派のこのような構造の萌芽は、上座部では Kv. から、有部では『婆須蜜論』から見られる。

- ・ところが上座部所伝の Mil. では、上記とは異なった施餓鬼の構造が見られる。Mil. は廻向について「施主から餓鬼に善業が移譲される」と理解している。これは Mil. が他業他得を容認する立場から廻向を理解していたことを示唆する。Mil. に説かれる廻向の譬喩も、後の上座部資料における廻向の譬喩とは異なっている。

よって上座部資料中に他業他得を容認する施餓鬼が説かれていることは、後代の資料で見られるような自業自得を貫く施餓鬼の構造が、どのような起源をもち、どのように展開したのかを解明する上で、重要な鍵となるように思われる。

#### Abbreviations

AN.: *Aṅguttara-Nikāya*. PTS

DhsA.: *Dhammasaṅgaṇī-Aṭṭhakathā (Atthasālinī)*. PTS

JAOS: *Journal of the American Oriental Society*

Kh.p.: *Khuddakapāṭha*. PTS

Kv.: *Kathāvatthu*. PTS

KvA.: *Kathāvatthu-Aṭṭhakatā (Pañcapakarana-Aṭṭhakatā)*. PTS

KvAṬ.: *Kathāvatthu-Anuṭṭikā (Pañcapakarana-Anuṭṭikā)*. VRI

KvMṬ.: *Kathāvatthu-Mūlatikā (Pañcapakarana-Mūlatikā)*. VRI

Mil.: *Milindapañha*. PTS

Pv.: *Petavatthu*. PTS

PvA.: *Petavatthu-Aṭṭhakathā (Paramatthadīpanī IV)*. PTS

Uj.: *Upāsakajanālikāra*. PTS

『雑阿含』：求那跋陀羅譯『雑阿含經』 T02(No.99)

『八埵度論』：釋道安撰『阿毘曇八埵度論』 T26(No.1543)

『癡智論』：迦多衍尼子造『阿毘達磨癡智論』 T26(No.1544)

『大毘婆沙論』：五百大阿羅漢等造『阿毘達磨大毘婆沙論』 T26(No.1545)

『毘曇婆沙論』：迦旃延子造五百羅漢釋『阿毘曇毘婆沙論』 T28(No.1546)

『婆須蜜論』：尊婆須蜜造『尊婆須蜜菩薩所集論』 T28(No.1549)

『順正理論』：尊者衆賢造『阿毘達磨順正理論』 T29(No.1562)

#### Bibliography

- Gombrich [1971] Gombrich, R. F.. “Merit Transference in Sinhalese Buddhism: A Case Study of Interaction between Doctrine and Practice”. *History of Religions Vol.11*, pp. 203-219
- Malalasekera [1967] Malalasekera, G. P.. “Transference of Merit in Ceylonese Buddhism”. *Philosophy East and West Vol.17*. pp.85-90
- McDermott [1975] McDermott, J. P.. “The Kathāvattu Kamma Debates”. *JAOS 95*(3). pp.424-433
- McDermott [1977] McDermott, J. P.. “Kamma in the Milindapañha”. *JAOS 97*(4). pp. 460-468
- Schmithausen [1986] Schmithausen, L.. “Critical Response”. *Karma and Rebirth: Post Classical Development*, Albany. pp.203-230
- Spiro [1971] Spiro, M. E.. *Buddhism and society : a great tradition and its Burmese vicissitudes*, London: Allen & Unwin (1982年再版の増補版は未見)
- Withanachchi [1987] Withanachchi, C.. ““Transference of Merit”: the So-called”. *Buddhist philosophy and culture : essays in honour of N.A. Jayawickrema*, Colombo. pp.153-168
- 入澤崇 [1989] 「廻向の源流」, 『西南アジア研究』30. pp.1-20
- 梶山雄一 [1-8] 『梶山雄一著作集』第一巻～第八巻, 春秋社
- 梶山雄一 [1973] 「廻向の宗教」. 『親鸞大系』思想篇 第三巻, 法蔵館. pp.315-341
- 梶山雄一 [1983] 『「さとり」と「廻向」 一大乗仏教の成立一』, 講談社現代新書
- 梶山雄一 [1997] 『「さとり」と「廻向」 一大乗仏教の成立一』, 人文書院
- 櫻部建 [1969] 『俱舎論の研究 界・根品』, 法蔵館
- 櫻部建 [1974b] 「功德を廻施するという考え方」, 『仏教学セミナー』20. pp.93-100
- 櫻部建 [1990] 「パーリ・アビダルマ研究 一その過去と将来」, 『水野弘元博士米寿記念論集：パーリ文化学の世界』, 春秋社. pp.317-327
- 櫻部建 [2002] 『阿含の仏教』, 文栄堂書店
- 玉井威 [1982] 「ミリンダパンハーにおける廻向説について」, 『真宗教学研究』6. pp.69-74
- 浪花宣明 [1987] 『在家仏教の研究』, 法蔵館
- 中村・早島 [1963-1964 i-iii] 『ミリンダ王の問い』1-3, 平凡社, 1963, 1964, 1964
- 藤本晃 [2000b] 「Petthavattu-Aṭṭhakathāにおける「指定 uddisati」説と「自業自得」. パーリ学仏教文化学』14. pp.53-68(L)
- 藤本晃 [2006] 『廻向思想の研究』, ラトナ仏教叢書
- 水野弘元 [1964] 『パーリ佛教を中心とした 佛教の心識論』, 山喜房佛書林 (改訂版：水野弘元 [1978])
- 水野弘元 [1978] 『パーリ佛教を中心とした 佛教の心識論』, ピタカ (初版：水野弘元 [1964])
- 森祖道 [1984] 『パーリ仏教注釈文献の研究』, 山喜房佛書林
- 森祖道 [1990] 「注釈文献の種類と資料的価値」. 『水野弘元博士米寿記念論集：パーリ文化学の世界』, 春秋社. pp.91-123

森祖道 [2010b] 「インド仏教研究とパーリ註釈文献」、『新アジア仏教史03 インド III 仏典からみた仏教世界』, 佼成出版. pp.104-107

渡辺樺雄 [1954] 『有部阿毘達磨論の研究』, 平凡社 (復刻版: 臨川書店, 1989)

〔付記〕

- ・パーリ文献は、基本的に PTS 版を底本とし、第六結集版(VRI: Vipassana Research Institute 版)を参照した。ティーカー(T.)など PTS から未出版のものは、第六結集版を底本とした。
- ・訳出における改行・段落分けなどは、底本にこだわらず、適時変更している。
- ・一重線、二重線、破線のアンダーラインは、〈引用元—註釈資料〉間の引用関係を表す。

本稿執筆にあたり、本庄良文先生より多大なご教示を賜りました。厚く御礼申し上げます。

註

- 1) 廻向や施餓鬼に関する研究は数多い。櫻部建 [1974b] (= [2002: pp.136-147])や梶山雄一 [1973] (= [1983: pp.148-184] [1997: pp.162-193] [8: pp.223-252])は、その問題点を手際よくまとめている。それによれば、廻向には次の二種類がある。

①方向転換型：自分が積んだ善業を他の者に分け与えて、その者を救済する。

②内容転換型：自己の善業を、自己の菩提に転換する。

このうち、②は自業自得の原則に反していないが、①は原則に反する。本稿が問題とするのは①の廻向である。

- 2) AN. x, 177と、その漢訳対応経である『雜阿含』巻37, 1041の両経が重要である。これらの經典は後の論書でも言及され、部派における施餓鬼の基本的な典拠になっている。
- 3) 藤本晃 [2006: p.5.20-32] を参照。森祖道 [1984] [1990] [2010b] や櫻部建 [1990] は、上座部註釈文献の資料的価値については未確定であるとする。
- 4) ただし、この Kv. における施餓鬼の理解が、初期經典の理解にまで遡り得るかという点で諸研究の結論は相違している。
- 5) KvMṬ. は執見の内容について次のように註釈する。

KvMṬ. 7, 6 (VRI: p.89.3-4):

「この理由によって」とは、「くもし此処から施された衣などによって生存しないならば、どうして随喜し、…略…喜悦を得るだろうか」という執見を確立したとしても」と言われている。

- 6) PTS は laddhi patitṭhapentiyā だが、復々註の記述に従い laddhiṃ patitṭhapentassā と読む。



- 7) Kv. および Mil. の成立年代については水野弘元 [1964: pp.17-40] (= [1978: pp.17-40]) を参照。
- 8) 玉井威 [1982] に対する批評は、浪花宣明 [1987: p.148 註8] を参照。
- 9) Cf. McDermott [1977: pp.462.a21-464.a3]
- 10) Uj. (p.289.8-20)にも同じ譬喩が現れる。
- 11) = 『八糖度論』巻1 (T26.773b23-c07)
- 12) 『大毘婆沙論』巻12 (T27.59a15-27) = 『毘曇婆沙論』巻7 (T28.44c08-20)
- 13) 『婆須蜜論』の成立年代については、渡辺棟雄 [1954: pp.134.17-136.8, p.205.1-14]; 櫻部建 [1969: pp.53.10-55.6] を参照。
- 14) 『婆須蜜論』巻8 (T28.784b22-c08):  
 以何等故。祭祀餓鬼得然不及餘趣。或作是說。此生趣自爾。  
 問此是我疑。何以故生趣自爾耶。  
 (1)或作是說。餓鬼嫉妬心意便顛倒。河無河想。見水不淨及諸飲食漿水。若餓鬼祭祀飲食。便發歡喜意心不顛倒。若彼餓鬼得增上行時彼受食。  
 (2)或作是說。餓鬼以嫉妬意。彼不能作好境界。若彼餓鬼有所祭祀發歡喜意。於彼得好心遊好境界。  
 (3)或作是說。餓鬼以嫉妬意身體長大心常懈疲。以懈疲心不至神妙餓鬼所。若彼餓鬼而祭祀食於施發歡喜心。便得身大心廣。以彼心廣大故。得遊諸大餓鬼所。彼亦歸伏禮跪。以身大故。彼餓鬼得增上行。於彼受食。  
 (4)復次與人作福彼人不得如餓鬼與彼施食者。餓鬼善心好施。彼便受行若彼飲食。是故非餘趣。
- 15) 『大毘婆沙論』巻12 (T27.61a15-b14) = 『毘曇婆沙論』巻7 (T28.46b03-c07):  
 問若爾何故。不名他作業他受果耶。  
 (1)答不爾。彼於爾時。由生敬信隨喜心故。見施功德慳貪過失。由此增長捨相應思。成順現受業得現法果故。  
 (2)尊者世友說曰。今所受果是先業所引。先業有障以今業除之故。無他作業他受果失。…中略…若彼親里為設施會。彼便信敬起隨喜心。見施功德慳貪過失。捨相應思。得增長故除想見倒。…中略…故彼親里祭祀則到。  
 (3)有作是說。彼先世亦有感飲食業。但由慳貪所覆蔽故。今時感得怯劣身心。諸飲食處必有大力鬼神守護。彼怯劣故不能得往。設復得往亦不敢食。若彼親里為設施會。廣說乃至捨相應思。得增長故。令彼身心轉得強勝。由此能至有飲食處。食其飲食。由此因緣祭祀則到。是故無有他作業他受果失。  
 (4)大德說曰。彼先雖造感飲食業。以微劣故未能與果。若彼親里為設施會。廣說乃至捨相應思得增長故。先所作業便能與果。故彼親里祭祀則到。由此無有他作業他受果失。

また、旧訳『毘曇婆沙論』では、「餓鬼が食を受用する業は、現世でつくられたものか、あるいは過去世でつくられたものか」という文脈の中でこれらの説が挙げられている。し

かし新訳・旧訳ともに、自業自得の原則を守っているという点では共通している。